

農村における戦後

—横光利一「夜の靴」を中心に

Postwar in rural areas
—”Yorunokutsu” Riichi Yokomitsu

坂上 幸
Miyuki Sakaue

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 博士後期課程

キーワード：農村，日記，戦後

Key words : Rural area, Diary, Postwar

1. 研究目的

横光利一『夜の靴』は、初出にあたる4編「夏臘日記」（『思索』1946年7月）、「木蠟日記」（『新潮』1946年7月）、「秋の日」（『新潮』1946年12月）、「雨過日記」（『人間』1947年5月）が「夜の靴」という表題の下に再構成されて、鎌倉文庫から1947年11月に刊行された長編小説である。

「私」が疎開先の山形で終戦を迎えてから同年12月8日に帰京するまでの農村生活が日記形式で語られている。従来の先行研究では、作者横光の疎開体験を素材としていること、刊行当時に横光が戦争責任者として名指しされていたこと、追求の対象となった「旅愁」についての言及が小説本文にみられることから、作者横光の戦争責任の問題あるいは再起を図る態度が看取される作品としてとらえられてきた。

だが、その生成過程からは、作者横光の心情がそのまま吐露された敗戦日記ではなく、何度も言説が再構成されて構築された物語であることが明らかになっている。井上明芳は「横光利一『夜の靴』成立過程論への前哨 —見出される〈祈り〉—」（『解釈』2012年7・8月）で、「『夜の靴』は物語として堅実に構築されており、日記体による作家横光への接近は見かけ上に過ぎない」と指摘している。たしかに、『夜の靴』の先行稿とみなされる直筆資料「夜の靴ノート」は、日記形式ではなく箇条書きで記されていた。初出4編の日記形式は疎開先での見聞を事後的に仕立て直したものである。

さらに、初出4編が再構成されて初版『夜の靴』

が生成された際にも初出には無い言説が付加されたことを、井上謙は『横光利一評伝と研究』（おうふう、1994年11月）で次のように指摘している。

「夏臘日記」は初出の文末の「思つた。」が「思つて、焰を見ながら坐つていた。」と加筆され、「雨過日記」は部分的にかなり増補されている。

「夏臘日記」の末尾に相当する一文に付加された一節が物語全体に与える影響は少ないだろう。だが、「雨過日記」は部分的にかなり増補されている」という指摘を見逃すことはできない。このとき如何なる言説が付加されたのだろうか。また、その言説が付加されたことによって、初版『夜の靴』は如何なる物語として成立したのだろうか。

本研究では、初版生成時に付加された言説の中から、「私」が観察する戦後山形の農村についての言説を抽出し、1945年12月8日前後の時代状況と対照させた。また、表題に掲げられた「夜の靴」の詩句が挿入されている場面についても検討した。これらの言説が付加されて初版『夜の靴』が生成された意義を明らかにすることを目指した。

2. 研究実施内容

井上明芳研究代表『横光利一『夜の靴』研究本文校異、注釈および関連資料調査』（国学院大学、2012年3月）で上下に並べられた初出と初版の本文を比較すると、「雨過日記」に相当する部分に一文以上挿入されている言説は21箇所にあつた。

まず、末尾に付加された言説の中で、「私が自宅の門へ這入つて行くのは十二月八日だつた。」と

「私」が帰京する日付が明記されたことに着目した。「実際の帰宅は12月19日か20日であったらしい」と井上謙が「『夜の靴』—再生のメッセージの果てに」（『国文学 解釈と鑑賞』2010年6月）で述べているように、疎開していた横光が実際に12月8日に帰京したわけではなく、初版『夜の靴』生成時に「私」が帰京した日付として「十二月八日」が選択されている。従来の先行研究においては「私」が帰京した「十二月八日」から太平洋戦争開戦日が想起されることを自明の前提として各々の論が展開されてきた。だが、「私」が帰京した「十二月八日」と太平洋戦争開戦日との関連性は揺るぎないものなのだろうか。

素直に考えれば、この物語の冒頭は義弟が「ボツダム宣言全部承認」と知らせに来た1945年8月15日であり、末尾の「十二月八日」は同年1945年のことである。「十一月一日」の日記にも「十二月八日」の日付を含む言説が初版生成時に挿入されていて、「太平洋戦争も同一の日」であると語られている。だが、その言説において見逃してはならないのは「釈迦が天上天下唯我独尊と唇から発した日は、十二月八日だった」という一節である。「私」は釈迦の誕生した日が「十二月八日」であると想起しているが、『仏教大事典』（小学館、1988年7月）には「日本では釈迦が一二月八日に成道した」と記されている。つまり、「私」は本来成道したとされている「十二月八日」に釈迦の誕生を重ね合わせ、この日付に誕生のイメージを付与しようとしている。

小説本文を遡ると、「私」が農村に疎開する契機を与えたのは釈迦堂の和尚だった。終戦後に「私」がすぐに帰京せずに農村を観察し始めた要因にも釈迦堂が関係していて、「私」が帰京する直前に出席した農会も釈迦堂で開催されていた。

このように、「私」が帰京した「十二月八日」は1945年のことである。「私」はこの日付に本来は異なる釈迦の誕生を重ね合わせて、何かが生ずるイメージを付与している。

「私」の疎開先であり、終戦を迎えてから1945年12月8日に帰京するまで観察し続けた戦後山形は如何なる地であったのだろうか。「座談会 新しい横光像を求めて」（『国文学 解釈と鑑賞』1983年10月）で井上謙は、戦後の山形には「日本のいわゆる農村の最も典型的な形」が残されていたために「農地改革のモデル県」になったと発言して

いる。また、「NHK特集 日本の戦後第3回 酒田紀行 農地改革の軌跡」（1977年6月23日放送）の番組内でマーク・ゲインは、取材先に山形県を選んだ理由として、「新しい思想の進入には抵抗の強そうな保守的な町であり、日本の民主化の絶好の試験地」であることを挙げている。

たしかに、小説本文を確認すると、山形県の田園風景が〈日本〉を代表する風景ととらえられ、鎌倉時代と変わらない保守的な営みが享受されている。また、地主制度に基づく村の権力構造も語られている。これら小説本文で示されている戦後山形の農村における特徴は、GHQが農地改革の試験地として注目した特徴と重なる。

山形県がモデル県となった農地改革とは如何なる政策であったのだろうか。戦後農地改革とは、当時半数を占めていた小作農の民主化、経済的困窮からの打破を目的とする戦後政策のことである。1945年12月9日にマッカーサーから、いわゆる「農民解放指令」が出されたことで事態は大きく進展した。1945年12月9日は、初版『夜の靴』の物語内部で「私」が帰京した翌日にあたる。この日付が明記されたことで、「私」が観察して語っているのは農地改革前夜における山形県の農村と規定された。

では、初版生成時には他にも農地改革に関する言説が挿入されたのだろうか。

まず、「十月一日」の日記には、「進駐軍からの命令」が農村に伝達された場面が語られている。命令の内容自体は農地改革と関連するものではないが、いわゆる「農民解放指令」が発せられる前日にあたる日付と共に挿入されていることは見逃せない。

また、「十一月一日」の日記において、「私」が座談会に出席した場面では、「この地方の大地主三人がしきりに小作人問題で討論してみた」と語られている。この物語内部で座談会が開催された時期にあたる1945年11月13日付の『朝日新聞』一面記事には、「農民解放近く断行 日本占領策の現段階」という見出しが掲げられていて、農地改革が行われることが予告されていた。「農民解放」とは、すなわち封建的地主制度が解体されることを意味している。したがって、この座談会で「大地主三人」は自らの階級の没落を目前にして、「しきりに小作人問題で討論」していると解釈できる。

さらに、「雨過日記」の末尾に付加された農会の場面でも、近々いわゆる「農民解放指令」が発せられることを見据えるかのように、「土地整理問題、耕作地の半分は地主の所有地であるこの村の小作状況、それに起つて来る経済の問題」等が予想され、対策が練られている。

このように、農地改革前夜と規定される「十二月八日」という日付と共に初版生成時に挿入された言説では、進駐軍からの命令が伝達される場面、封建的地主制度の解体を目前にして小作人問題について討論する大地主、土地と経済の問題について予想して対策を練る農会の様子といった、農地改革が行われることを見据えた動きが語られていた。

農地改革前夜の12月初旬に釈迦堂で開催された農会で「私」は、「まだ生じてゐない農民組合の卵」は、「地主の多い今夜のこの集り」に代わって民主的な自治を行う組織に成ると予想している。1945年12月11日付の『朝日新聞』一面記事に「経済的障碍を除去 農業協同組合運動の育成へ」という見出しが掲げられているように、農民組合の設立も、1945年12月9日に発せられた、いわゆる「農民解放指令」で要求されていた。したがって、「私」は「農業協同組合運動の育成」に向けた法整備が要求される直前の物語内部で開催された農会の場面において、その先の未来に誕生するであろう農民組合による自治を予測しているのである。

ところで、「私」が「農民組合の卵」が生じてくるのは「あの傘を私らに貸してくれた、正吉青年たちの集りではなからうか」と予測する正吉青年とは如何なる人物なのだろうか。小説本文を遡ると、「十一月——日」の日記には正吉青年に関する言説が初版生成時に挿入されている。彼は「青年の力で村を澆刺たらしめたい」と考えている改革意欲の旺盛な若者であると説明されていて、和尚もその「情熱には大いに賛成」している。

これをふまえると、農会の場面で「私」は改革意欲が旺盛で、和尚もその「情熱は大いに賛成」していた青年に未来の農村を託すかのように、農民組合誕生の兆しを予想していることが明らかになる。

では、農業協同組合の育成に向けた法整備が要求される直前にあたる1945年12月初旬の物語内部で予測される農民組合誕生の兆しは、初版『夜

の靴』が刊行された当時の現実世界と如何に接続されるのだろうか。

まず、4つ目の初出「雨過日記」が発表されたのは1947年5月、初版『夜の靴』が刊行されたのは1947年11月のことである。したがって、これまで検討してきた言説が付加されて初版『夜の靴』が生成されたのは、1947年5月から同年11月の間であると推測できる。

次に、現実世界において農業協同組合法が成立して施行された時期と対照させると、農民組合誕生の兆しを語る言説が付加された1947年5月から同年11月の間に、農業協同組合法案は閣議決定されている。その後、初版『夜の靴』が刊行された1947年11月に農業協同組合法は成立し、公布された。そして、物語内部で「いづれこの村にもそれはちかく発生して来ることだけは確実」と語られているように、農業協同組合法は初版刊行直後の12月15日に施行されている。

このように、農会の場面で「私」は、改革意欲の旺盛な青年に託すかのように農民組合誕生の兆しを予測していた。農業協同組合の育成が要求される直前の物語内部で「私」が予測する農民組合誕生は、農業協同組合法が施行される直前にあたる初版『夜の靴』刊行当時において、まもなく実現される民主的な農村の在り方としてとらえることができる。

最後に、初版生成時に「夜の靴」という表題が掲げられた意味について検討した。初版生成時には、前述した農会の場面の後に、「夜の靴」の詩句に関する言説も付加されている。この言説を読み解くためには、「私」が農民を観察する姿勢をおさえておく必要がある。

東京で空襲を体験してから山形県の農村に疎開して終戦を迎えた「私」は、空襲を体験していない農民との「判然と分れた心の距離、胸中につきり引かれた境界線」を「不通線」という語で表す。つまり、「私」が観察を始めたことの根底には農民との理解不可能性が在る。そして、「人間研究」を行うためには、農民と共に働かずに「尊敬」する態度を貫いて観察した方が良い結果をもたらすと考えている。

では、他者としての農民を観察することで達成される、「私」の「人間研究」とは如何なるものなのだろうか。観察対象である「感歎すべき農家の労働」に自らの労働を対照させて、「いや、自

分の労働は彼らに負けてはみない」と、自らの労働の意義を再確認している。「私」の職業が作家であることは農民には伏せているが、日記には随所で示されている。したがって、「私」が目的とする「人間研究」とは、他者としての農民の労働を尊敬のまなざしで観察すると同時に、観察して語る作家としての労働を見つめ直すことでもあったといえる。

さて、「人間研究」を行う姿勢をふまえて、農会の場面の後に語られている「夜の靴」の詩句に関する言説を検討した。

農会に招かれていた「私」は皆の一足先に帰っていく。「私一人は今夜の客であつた」という一節からは、農会で語り合う農民の一員とはならず、帰京する「客」であると、自己を規定していることが読み取れる。この農民とは異なる立場に身を置いて「私の靴音だけ」を頼りに一人歩く姿は、前述した「人間研究」を遂行する姿勢と変わらない。その自身の「靴音」から想起される「夜の靴」というこの詩の題を好ましい「人間の孤独な音の美しさ」ととらえている。農民とは異なる存在としての自己を見つめ続けた結果、その「人間の孤独な音」を肯定的にとらえた「私」は、作家として自らが属する東京へと帰っていく。

3. まとめと今後の課題

本研究では、初版『夜の靴』が生成された際に、初出にはない言説が付加されて成立したことの意義を明らかにすることを目指した。

まず、「私」が帰京した日付が初版生成時に「十二月八日」と明記されたことに着目した。従来の先行研究において、この日付は太平洋戦争の開戦日と重ね合わされて解釈されてきた。だが、物語の冒頭で語られているのは1945年8月15日の出来事であり、末尾で語られている「私」が帰京した「十二月八日」は同年1945年のことである。一方で、本来釈迦が成道したとされている「十二月八日」に、「私」は釈迦の誕生を重ね合わせ、この日付に誕生のイメージを付与しようとしてもいた。

「私」の観察対象である山形県の農村はGHQに農地改革の試験地として注目されていた。「私」が帰京した1945年12月8日は、いわゆる「農民解放指令」が発せられる前日にあたる。農地改革前夜と規定される「十二月八日」という日付と共に初版生成時に挿入された言説では、農地改革が行われることを見据えた動きが語られていた。

また、農会の場面で「私」は、改革意欲の旺盛な青年に託すかのように農民組合誕生の兆しも予測している。農業協同組合の育成が要求される直前の物語内部で「私」が予測する農民組合誕生は、農業協同組合法が施行される直前にあたる初版『夜の靴』刊行当時においては、まもなく実現される民主的な農村の在り方としてとらえることができる。

最後に、初版の表題に掲げられた「夜の靴」の詩句について語られている言説を検討した。「私」が「夜の靴」というこの詩の題から看取しているのは、他者としての農民を合わせ鏡に自己を観察し続けたことで導き出された「人間の孤独な音の美しさ」だった。「私」は釈迦の誕生と重ね合わせた「十二月八日」に作家としての再出発をも重ね合わせるかのように、「人間の孤独な音の美しさ」を携えて新たな戦後の東京へと向かっていくのである。

これらの言説が付加されたことにより、初版『夜の靴』は戦後山形における民主的な農村の誕生の兆しと、それを観察し続けた作家「私」の再出発の兆しが語られる物語として生成されたのである。

4. この助成による発表論文等

①雑誌論文

[1] 坂上幸「横光利一『夜の靴』の生成—戦後山形の農村にみる誕生の兆し—」『大妻国文』査読有り 第52号 2021年 205頁～224頁

②研究発表

[1] 坂上幸「横光利一「夜の靴」の生成—戦後山形の農村にみる変革の兆し—」大妻女子大学大学院日本文学専修研究発表会 2020年11月19日